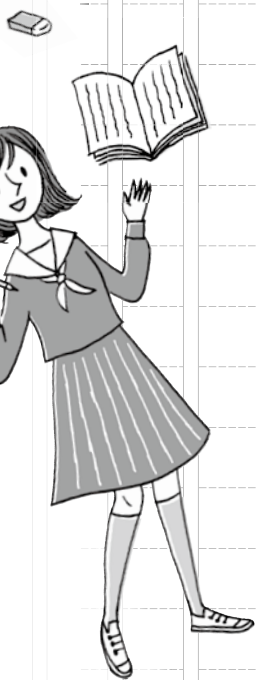




特集



鑑賞文を書くこう



一年三学期に、鑑賞文を書くという教材が位置づけられました。生徒に鑑賞文を書かせる際、どのようなことに気をつけて指導したらよいのでしょうか。今号では、特に美術作品についての鑑賞文を、考えていきたいと思っています。

イラスト…大塚砂織

提言 1

「感想文」から「鑑賞文」へ

自分の思いを述べる「感想文」と違い、「鑑賞文」は、対象となるもののよさを、根拠を明らかにして、論理的に説明しなければなりません。子どもたちは、小学校からよく書いている感想文は得意なのですが、論理的に説明する文章となると、途端に苦手意識を強くしてしまいます。一年一学期に「わかりやすく説明しよう」という教材で、観点を決めて説明するという学習を行っています。一年三学期で鑑賞文を書かせることは、とても有効だと私は思います。

鑑賞文を書く場合、よさを論理的に説明するために、さまざまな観点から、その対象を見ることが大事です。例えば、絵画だったら、「色彩」「構図」「全体の印象」などの観点が挙げられます。それらの観点は、最初から教師が示してしまうのではなく、子どもたちから出させたいものです。堀江佐和子先生の授業（P8-13参照）では、子どもたちに、作品の魅力を付箋紙に書かせ、そこに書かれた言葉を取り出しながら、

観点の説明をしていました。子どもたちどうして作品の魅力について話し合わせ、そこから観点を探していくのはよい方法です。話し合うことで、作品の見方が広がり、さまざまな観点が見つかると思います。

それから、鑑賞文の授業では、ぜひ子どもたちの語彙を広げてほしいですね。例えば、ゴッホの「ひまわり」について、「花びらの描き方がいい」と言った子どもがいたら「他の言い方をしてごらん」と投げかけましょう。すると、「花びらの描き方が細かい」「ひと筆で描いたようだ」など、子どもたちなりに表現してきます。教師がすかさず「『細かい』は、『繊細だ』と言ってもいいかもしれない」「ひと筆で描いたような『筆づかい』がいい、と表現してもいいね」と、子どもたちから引き出した言葉をもとに、新しい言葉を示していくことで語彙が広がります。

また、鑑賞文を書く前に、日常的に描写の練習をしておくといでしょう。授業の初め五分ぐらいで行える簡単な練習でもか

まいません。例えば、校庭に落ちていた葉っぱを見せて、「この葉の色を言葉で表現してごらん」と投げかけたり、子犬の写真を見せて「このかわいらしさを言葉で表現してみよう」と投げかけたり、そのような描写の練習を日頃から積み重ねておくのです。そうすると、鑑賞文を書くときに、さまざまな言葉が子どもたちから出てくると思います。

鑑賞文は、批評文の入りの口とも言えます。上の学年にあがったときに、説得力のある批評文が書けるよう、一年生で鑑賞文を書く練習をしつかり行っておきたいものです。

（談）



やすい ふさこ
安居総子

千葉県生まれ。元岐阜大学教授。前大正大学教授。専門分野は国語教育。著書に、『授業開きの構造』（光村図書）、『伝え合い・学び合い』の時代へ』、『読書生活者を育てる』（以上、東洋館出版社）など多数。光村図書中学校『国語』教科書の編集委員を務める。



特集

鑑賞文を書くこう